



目次

- P1 企画展「生活のデザイン」8月31日まで開催中！暮らしの中に自由を求めた人びとの姿
- P2 『2016年度春季企画展「らい予防法」をふりかえる』図録を改訂して出版
- P2 ミュージアムトーク『図書室からの招待状～頁をめくり、想いを迎える～』開催のご報告
- P3 今春より新収蔵資料データベースを導入 収蔵資料管理の利便性アップ
- P3 研究から『研究紀要』第9号完成
- P4 管理部より こんなところに資料館広告!!
- P4 お知らせ／利用案内

企画展「生活のデザイン」 8月31日まで開催中！ 暮らしの中に自由を求めた人びとの姿

ハンセン病による障害のある人びとが使ってきた道具を紹介する企画展「生活のデザイン ハンセン病療養所における自助具、義肢、補装具とその使い手たち」が、ようやく開催の運びとなりました。前号（2022年1月1日・No.114）で2月5日（土）から開催と報じましたが、東京都などにおける「まん延防止等重点措置」の適用等に伴い延期とし、3月12日（土）から改めて開幕したものです。

本展は大きく4つのコーナーに分かれています。「1. 療養所における自助具、義肢、補装具」では、入所者（使い手）自ら道具を作り、使った時代について展示しています。ブリキの義足やわか下駄の実物、包帯を巻き義足をつけて働く様子の写真、患者自身が図解したブリキの義足の作り方なども紹介します。

続いて「2. 歩くための道具」では、館蔵の義足11点ほか、補装具をつけて履くための靴などを集めました。失った足や義足への想いを綴った文芸作品、失明した義足使用者の声なども含めて、自分で歩くことの意味を伝える力強い資料群です。

次に「3. 手で使う道具」で、垂手やつまみ動作の障害などがある場合に使う道具をご覧いただいています。食事に欠かせないホルダー付きのスプーンやフォーク。失明後も自分で身の回りを整え続けた人が常備していた、手先の仕事を助ける「やっここ

や千枚通し。1990年代に撮影された夫婦舎の台所の写真からは、自助具が療養生活を豊かに形作ってきた様子が伝わってきます。

展示後半は「4. それぞれの人の道具」と題し、個性豊かな道具とその使い手について紹介しています。またここでは入所者と、その人の使う道具の作り手である義肢装具士へのインタビュー映像もご覧いただけます。使い手と作り手の対話からは、工夫をこらした道具が生まれる過程をうかがうことができます。

上記のほか、トピックとして「洗面と用便」「失明と自助具」「病棟とセンターにて」の3つのミニテーマについても展示しています。

本展に関連するイベントも準備中です。「ブリキの義足」の製作図を参考に、身近な素材でその作り方を再現するワークショップ「ブリキの義足を作ってみよう」、学芸員によるギャラリートークなど、新型コロナウイルス感染対策を行いながら開催を予定しています。詳細は決まり次第、当館HPなどでお知らせします。

事前予約制にてご不便をおかけしますが、おひとりでも多くの方にご覧いただけますようお待ちしております。

（西浦直子）



『2016年度春季企画展 「らい予防法」をふりかえる』 図録を改訂して出版



2021年度は「らい予防法」が廃止されて25周年の節目の年に当りました。今回、当館では『2016年度春季企画展「らい予防法」をふりかえる』を改訂して再版しました。

本企画展は、なぜ法の廃止が遅れたのか、どのような経緯で廃止

に至ったのか、回復者・関係者は「らい予防法」とその廃止をどのようにとらえたのかという観点から制作されました。ハンセン病政策に関わる法律の御署名原本等を国立公文書館から借用して展示し、「「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟」の判決文を参考に、法文と関わらせながらその誤りを解説しています。ハンセン病問題の核ともいえる法律を扱った企画展であったためか社会の関心も高く、会期を終えてまもなく在庫切れとなった図録でした。これらの内容はほとんどそのままとし、内田博文館長の執筆した「はじめに（改訂版）」と「資料「第十二回国会 参議院厚生委員会会議録第十号」—いわゆる「三園長証言」—」を新たに収録しました。

1951年11月8日の参議院厚生委員会・らい小委員会では3人の療養所長（林芳信・光田健輔・宮崎松記）は隔離政策の強化を求めました。専門家の意見としてこの発言がその後の政策に影響を与えたと言われ、新たなハンセン病対策を期待した入所者の間には波紋が広がりました。これをきっかけとして、全国国立癩療養所患者協議会（現全国ハンセン病療養所入所者協議会）は初めての大規模闘争である「らい予防法闘争」を展開していきます。この国会会議録を企画展の内容と共に読みいただき、改めて「らい予防法」の誤りについて考えていただければと思います。ご希望の方は当館の受付まで。

(田代学)

ミュージアムトーク

『図書室からの招待状～頁をめくり、想いを辿る～』開催のご報告

国立ハンセン病資料館が実施している連続セミナー「オンラインミュージアムトーク」の一環として、2022年3月26日（土）14時より『図書室からの招待状～頁をめくり、想いを辿る～』をお届けいたしました。

当館図書室の基本的な機能や提供しているサービスについての紹介をはじめ、郵送を含む貸出し手続きの一連の流れ、所蔵資料の分類方法について、当館の中核コレクションを成す各療養所の機関誌についてなど、普段ご説明する機会のあまりない内容をこの機にご紹介させていただきました。

当館図書室の前身にあたる多磨全生園の中にあつた「ハンセン病図書館」や、その主任であつたハンセン病回復者の山下道輔さんのエピソードについてもお話しさせていただきました。山下さんが手書きで書き写した多磨全生園の機関誌「山櫻」の初期のものや、山下さんが収集していた資料のうち、最初に入手した書籍「春を待つ心」など、貴重な資料の実物の映像も交えてご紹介いたしました。

後半では、図書室史上初めて閉架書庫の中へカメラを入れ、移動書架という書棚に収められた資料をご紹介いたしました。移動書架に収められている資料群の一つ、写真家の趙根在さんから寄贈していただいた蔵書は当館の主要コレクションの一つで、貸出しも可能な資料です。

今回のミュージアムトークの内容は、当館のYouTubeチャンネルにアーカイブとして追加される予定です。見逃してしまったという方も、ぜひそちらでご覧ください。

(斉藤聖)



ご紹介した『初期山櫻』と『春を待つ心』

今春より新収蔵資料データベースを導入 収蔵資料管理の利便性アップ



データベースに登録する資料の撮影風景

当館では、ハンセン病問題を理解するうえで重要な資料を収集・保存しています。これらの収蔵資料を管理するために必要なのが、データベースとよばれる収蔵資料管理システムです。

データベースには、資料の名称、大きさや重さ、使われていた場所、資料の写真のほか、収蔵庫内の保管場所、修復や展示の履歴、調査で得た知見などを記録しています。データベースに登録された資料は、調べたい資料のキーワードなどを入力することによって瞬時に検索され、当館で開催する企画展や啓発イベントの企画を立てる際に活用されます。このように、収蔵資料に関する膨大な情報を資料館全体で共有し活用するという点においてもデータベースの役割は重要です。また、これらの情報は世代を越えて継承されます。

これまで、当館では収蔵資料を実物・文書・作品・写真に分類し、それぞれの分類ごとにデータベースを作成していました。今回導入した新たなデータベースは、館内に複数存在していたデータベースをひとつにまとめ、当館の10万点以上におよぶ収蔵資料を一括で検索できるようになりました。

また、いままで館内ネットワーク上のみで利用していたデータベースをクラウド型収蔵品管理システムに移行し、館内でしか検索・登録できなかった収蔵資料に関する情報が、場所を選ばずに検索・閲覧したり、日々の業務のなかで容易に情報の修正や追記をしたりすることができるようになりました。

さらに、新たなデータベースは収蔵資料をWEB上に掲載する情報公開機能も備えており、今後、資料整理が進んだ段階で収蔵資料の公開も進めていく予定です。

(橋本彩香)

研究から

『研究紀要』第9号完成

『研究紀要』第9号が発行されました。当館による研究成果の還元を目的に毎年1回発行されています。

木村哲也の論文「戦後ハンセン病療養所の短歌活動—合同歌集『陸の中の島』を中心に—」は、1956年に刊行された初の全国療養所の合同歌集を取りあげ、その作品群が切り拓いた表現の画期性について論じています。

金貴粉の論文「植民地朝鮮のハンセン病政策における朝鮮癩予防協会の誕生とその役割」は、これまで研究対象とされることがほとんどなかった朝鮮癩予防協会を取りあげ、その役割について論じています。

鈴木陽子の論文「汝の妻も世の女なるべし—米軍統治下愛楽園に結成された婦人会—」は、愛楽園の婦人会が園内に設立した美粧院を通じて、ハンセン病問題史における女性の活動に光を当てます。

西浦直子の論文「卒業文集『青い芽』における中学生の表現をめぐる一考察—「転換期」の多磨全生園における隔離の相対化への試み—」は、多磨全生園の中学生の作文や版画から、その表現の意味を読み解きます。

この他、橋本彩香の資料紹介「国立療養所多磨全生園で製作された義肢装具、自助具」は、当館が所蔵する資料のなかから、ハンセン病の後遺症に対応して生み出された義肢装具・自助具を多数紹介しています。

吉國元による活動報告「ギャラリー展「コロナ時代 ハンセン病回復者からのメッセージ」」は、コロナ禍のさなかに病いの当事者の声を、展示を通して発信することの意義を論じています。

『研究紀要』は、来館された希望者に配布するほか、当館HPからPDFファイルでダウンロードできます。ぜひご覧ください。

(木村哲也)



管理部より

こんなところに資料館広告!!



当館のことをもっと多くの方に知っていただきたい、少しでも多くの方にご来館いただきたいという願いから、沿線の主要駅に看板を、また沿線の車内に広告を掲出しております。今回はその掲出場所をお知らせします。西武池袋線・西武新宿線にご乗車の際は、少しスマホを見ずに、景観や窓上ポスターを見て、当資料館の看板や広告を探してみてください。

1. JR武蔵野線新秋津駅
上りホーム階段下に額面看板を掲出しています。
2. 西武池袋線清瀬駅
下りホームに駅だて看板を掲出しています。
3. 西武新宿線久米川駅
久米川駅ホーム前に電飾看板を掲出しています。
4. 西武池袋線練馬駅
下りホーム壁面に額面看板を掲出しています。
5. 西武新宿線高田馬場駅
下りホーム前に電飾看板を掲出しています。
6. 西武バス清瀬駅南口2番乗り場
アンドンポール広告を掲出しています。
7. 2021年9月～西武池袋線車内窓上ポスターを
50車両にランダムに掲出しています。
8. 2021年11月～西武新宿線車内窓上ポスターを
90車両にランダムに掲出しています。

最近では、駅看板等を目にいただき、当館のホームページを閲覧してからご来館いただくお客様も増えてきております。

今後も、当館の取り組みを多くの方に知っていただくためにSNSも含め広く広報に努めていきたいと思っております。

3月末～4月は桜がとても美しい季節となります。自然豊かな当館にぜひ足を運んでいただき、ハンセン病の歴史やハンセン病問題について少しでも考えていただけたら幸いです。

(及川由紀子)

お知らせ

■企画展(1面参照)

「生活のデザイン ハンセン病療養所における自助具、義肢、補装具とその使い手たち」(会期変更)



会期：2022年3月12日(土)～8月31日(水)

会場：当館企画展示室

公式サイト：<https://www.nhdm.jp/events/list/3356/>

※上記URLよりちらしをダウンロードできます

※新型コロナウイルス感染拡大等の状況により、会期等を変更する場合があります

詳細は本展公式サイトなどをご確認ください

利用案内

新型コロナウイルス感染対策のため、2022年1月22日(土)から事前予約制・定員制により開館しています。状況により変更の可能性がありますので、当館HPなどで最新情報をご確認のうえご利用下さい。
<https://www.nhdm.jp/news/3456/>

■開館時間と入場定員(4月1日現在)

午前の部：9：30～11：00 10名

10：00～11：30 10名

午後の部：13：30～15：00 10名

14：00～15：30 10名

■団体でのご利用を希望される方へ

10名以上でのご見学を希望されるお客様は、オンラインによる団体見学プログラムをご活用ください。学芸員による常設展示室のライブ解説などをご提供いたします。また、オンラインによる学芸員の出張講座も提供しております。いずれも無料です。

■休館日 毎週月曜日(祝日の場合は開館)
年末年始、国民の祝日の翌日、館内整理日

■入館 無料

■交通

- ・西武池袋線 清瀬駅南口より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
〔「ハンセン病資料館」下車〕
- ・西武新宿線 久米川駅北口より
西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分
〔「ハンセン病資料館」下車〕
- ・JR武蔵野線 新秋津駅より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
〔「全生園前」下車、徒歩10分〕
または徒歩約20分

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

TEL 042-396-2909 FAX 042-396-2981

URL <https://www.nhdm.jp/>